★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第 48 回

『渇水』

1. 狭くなる人生

サイトで何気なく名前を検索して、あっと思った。

教え子だった男の子がどうやらアナウンサーになったみたいなのだ。それで、SNS を切ったのかと思った。マスコミに出る身になったから、LINE やインスタグラムをしていると変に詮索される可能性がある。また落ち着いてきたら、オフィシャルなインスタグラムを始めるだろう。そうなったら、リクエストを送ってみようか。

彼に関しては特別だった。何しろ、俺の授業を４つぐらいとっていたのだ。授業中よく喋る子で、しかも話のセンスがいい。俺がこれまで教えた子の中でも、ベストスリーにはいるくらいの子だった。

長年教えていると色々な学生と出会う。なかには嫌な絡みをしてくる学生もいて、本当に傷ついたこともあったものだ。

もうだいぶ前のことだが、英文レポートの課題を出したら、ある女子学生がまるごと全部俺の悪口を書いてきたことがあった。普通はアンケートであっても、あそこまで露骨に先生の悪口なんて書かない。

すっかり混乱して、他のところで他の学生たちにそのことを話したところ、「そういう子はツンデレなんですよ。先生に構って欲しいから、わざとそういうふうなことをするんですよ。小学生くらいの子が自分の好きな子をいじめるのと同じ心理ですよ」と言われた。

なるほどねー。確かにその子はいかにも目立ちたがりという雰囲気の子だった。そうだとしても、ああいう形のスタンドプレイをする子は、俺は不愉快である。今でも彼女のことは根に持っている。

しかし、そのアナウンサーになった子は違っていた。いっぱい話すし、クラスで一番目立つ子だったのだが、決して俺を傷つけることは言わない。周りを不愉快にさせることも言わない。むしろ、

楽しい話で授業のムードをもりあげてくれる。しかも、ただ単にたくさん話すだけではなく、的をいたことを言ってくれるため、彼がいると授業がしやすかった。

そのうえ、イケメンで、体育会だからガタイもいい。まさにアナウンサーは天職だったのだろう。

彼とは 2 人でご飯を食べたこともある。彼にとっても俺は特別な先生の 1 人であることは間違い無いだろう。卒業前にもう一度ご飯を食べようと彼の方が言っていたのだが、結局果たせずじまいだった。とは言っても、彼とは本当に近い仲だったのである。

彼がニュースにレポーターとして登場している姿を見て驚いたのは、話し方や声色が変わっていることだった。やはり、アナウンサーになって、研修があって、おそらく自分の癖を直されるのだろう。別人のような話し方になっているのだ。なんとなく寂しい気持ちにもなったものだった。

何回かそのテレビ局のインスタにコメントを書いたりもしてみた。彼は気づいただろうか。あまりし過ぎるとストーカーと思われるので、もう止めにしよう。いつか彼の方も気が向いて、縁があればまた会う機会もあるかもしれない。それにまだ入社したばかりで忙しいだろうし・・・。

そんなわけで、ベスト教え子の 1 人が有名になっていくのは嬉しいような、寂しいような複雑な気持ちだった。もちろん喜ばなきゃいけないんだけど、なんとなく胸が痛い。

大きな世界に出ていく彼ら。俺はこれからどんどん生活が狭くなっていくだろう。もう 60 が目前なのだ。

とはいうものの、特別悪いことが起きているわけではないのだ。むしろ、ここのところ生活そのものは好調なのである。

今学期も一度も休講しないで、まっとうすることができた。別に何も悪いことは起きていない。学生たちとのコミュニケーションも好調で、何故か今年の学生たちは俺を食事に誘ってくれる。この歳になって、若い学生とこれだけ付き合えるというのは、先生の役得である。親子以上に歳が離れているのに、彼らはフレンドリーに接してくれる。

授業自体ももう教歴 30 年で、慣れているので、適当にこなす自信はついてきていて、それほど授業の運営に悩むこともなくなった。

貯金もある程度はあるし、60 になったら年金や年金基金は払わなくてもよくなるので、経済的にはゆとりがでるかもである。もちろん、できる限り長いこと払っておいた方が、支給額が高くなるので、払っておくに越したことないのだけれど。

ただ、つらいのは 60 近くになって、希望がもてないということなのだ。若い頃だったら、まだ将来何かある、未知な世界が開けるという幻想があったのだが、今となってはもう何も特別なことは起きないだろうし、あと寿命がどれくらいあるのかわからないけど、それをどう生きこなしていくのか、それを考えざるを得なくなっているのである。

2. 死を見つめる

実は先日ミニドッグに入った。毎年のことなのだ。

俺は芸術家保険に入っているので、毎年ミニドッグを多少のお金を払って受けるのだが、今年は年度中に 60 になるのでジャスト検診で、無料で受けることができる。

実は 3 ヶ月ほど前から保健指導も受けている。

60 になるとさすがに死を意識するのだ。人間の人生って、本当に上手くいかないもので、上手いこと出世コースをたどっていた人が、早死にしたり、癌になったりする。鬱病や統合失調症で辞めていく人もいた。

その点でいくと俺は、結婚とか子供をもつことはできなかったけれど、京都という街でそれなりのライフストーリーを築いて、どうにか全うしようとしている。

幸せな人生なのかもしれないのだ。

しかし、だからこそ、ここで落とし穴が待っているのではないか、不幸が待っているのではないかという不安がよぎるのである。俺の人生はどういう形で終わりを告げるのだろうか。

母はまだ85歳で元気だ。まだ親が生きているのに、自分の死のことを考えるのは早いだろう。母は本当に苦労の多い人生を歩んだ人だったけれど、60歳過ぎてから人生が開けて、今は幸せな老後を送っている。

そんな母に息子が自分よりも先に死ぬなんてそんな過酷な運命が待っているとは思えない。前にも書いたと思うが、25年ほど前に弟がなくなっていて、3人の息子のうちの2人も親より先に行くなんて、そこまで過酷な運命はいくらなんでもないはずなのである。

それに俺の体は病気の兆候はまったくない。

まだミニドッグの結果が来ないことにはわからないが、つい1ヶ月ほど前に尿検査を受けた際は、全く問題はなかった。血液検査も半年ほど前に受けて問題はなかったので、今回も大丈夫だとは思うのだが、つい絶望的な予想をしてしまう。

死は誰にも避けられない。むしろ死ぬことで人は平等になるのだ。この世はあれこれ不平等なことだらけだから、死後の世界の方が平等なユートピアなのかもしれないのだ。しかし、死後の世界なんて誰にもわからない未知の世界だから怖い。これから90歳、100歳まで生きたとしても、それほど大していいことは起きないだろうとわかっていても、やはり死は怖いのである。

その一方で生きることの苦痛もこの頃切に感じている。時間が潰せないのである。

俺はまた例によって、入眠剤をオーバードーズしている。といっても、過激なオーバードーズではないし、薬をもらっている心療内科の先生にもそのことは話しているし、俺は予定よりも1週間くらい早くにクリニックに行っているので、俺が多めに飲んでいることはわかっているだろう。俺の行っているところは、調剤薬局でダブルチェックが入るところなので、もし危ないほどたくさん飲んでいるのだったらストップがかかっているだろう。

それに俺の飲んでいる眠剤は、それほど残らないと聞いている。貯めて、大量に飲んでも自殺できない眠剤なのである。もう30年も飲み続けていて、この眠剤があったからこそ、仕事がこなせてきたのである。

ただ困るのは意識が覚醒してしまうことだった。

俺は普段意識を覚醒させて生きている。非常勤講師という身だから、仕事はたくさんこなさなくてはならない。そのため、ちょっとでも暇があると先のテストの準備をしたり、採点をしたり、先へ先へと仕事を進めていく。

そのため、常に神経が緊張しているため、暇ができると逆に何もすることがなくて、手持ち無沙汰になってしまうのである。そのため、早く寝ようかと眠剤を早目に飲んでしまい、しかしすぐには眠れなくて、眠剤の入ったかったるい体の状況のまま、時間を過ごしてしまい、結局実際に寝る頃には眠剤が切れている。

その悪循環がずっと続いているのだ。

こうなったのは比較的最近で一時期は眠剤は極力少なくして寝ていた時期もあった。あれは30代の頃だろうか。あの頃はまだしたいことがあったのだ。

しかし、この頃はしたいことがない。暇な時に、一番したいことは寝ることである。

今の心療内科の先生とのつきあいももう30年近くである。最初の頃は他の先生のところにも行っていたが、いつの間にかこの先生のところに定着してしまい、もう20年ぐらい他のクリニックには行っていない。

この先生はダンディで、やさしい先生で、もう70代である。他の先生たちからの評判もいいようだ。実は、10年ぐらい前までは他の場所でクリニックをなさっていた。ところがそこは若い先生に譲られて、今はもっと中心地の大きなところでなさっている。

俺は前のクリニックを他の先生に譲られた時に、

この先生、もう引退することを考えていらっしゃるのかと考えていた。しかし、そうではなく栄転だったのである。あの時、この先生もう 60 過ぎくらいだったはずだから、本当にお元気で、生涯現役。

だけど、いつまでこの先生に頼ることができるのだろうか。心配になって行くのだった。

つくづく、人生は上手くいかない。

今の時代、戦争で死ぬという人は少ないけれど、実際の戦争はなくても、人間はみんな戦争を生きているのだと実感させられる。

俺の場合は、ジェンダーとの戦争だった。

3. かわいいお爺ちゃん

ここにきて、ボクシングジムに行くたびに動画をとっている。とは言っても、自主的にとっているのかというとそうではなく、ジムに来ている高校生の男の子がふざけて俺のスマホを使って、俺のトレーニング風景をとってしまうのである。

それをその後、インスタに上げるのだが、これが意外に好評でたくさんいいね！がくる。

先日は、「むちゃ、可愛いです」というコメントが来た。

俺は、「かわいい」と言われるのは結構嬉しいのだ。60 近くになった爺さんがかわいいだなんて、むしろ変なのかもしれないが、俺は若い頃、きもいと言われ続けたので、かわいいと言われることで少しずつ若い頃の禊をうけているような気持ちになる。

ボクシングジムは男ばかりだ。女の人もいるのだが、俺の行く時間帯に女性がいたことは一度もない。

俺は子供の頃、男子校に行くのは怖いという思いがあった。俺は女の腐ったような子だと言われる子だったので、男子校なんかに行ったら、いじめられるだろうと思っていた。

ところが、実際にはそうではないのだ。ジェンダーを吹き込むのは同性よりも異性である。異性がいると変に見えを張ったりしなきゃいけなくなる。男ばかりだとそれがない。

俺はボクシングジムでは、この年になって平気で上半身裸でトレーニングすることもあるし、マッチョポーズの写真を撮る。はい！とデカい声を出したり、オーライと言いながら、パンチの練習をしたりする。体育会気分を味わえるのである。

先日、保健指導でジムに通っているという話になって、「ボクシングジムはこの頃なんですけど、ジム自体は 20 代の頃からなんです。40 過ぎてからはそれほど真面目に言っているわけではないんですけど」というと、保健指導の女の先生は驚いた様子だった。

「大抵の人は一時期ジムに通っていた人はいるんですけど、そんな何十年も通われている人なんて、他にいないから」と彼女は言った。

俺はきっと若い頃のコンプレックスのせいで、行かなくても一応はジムに籍をおいておかないと気が済まないのである。

もし、子供の頃にスポーツが曲がりなりにもできていたらと思うことは今でもある。もし、スポーツができていたら、男の子たちと同一化することにここまで困難をきたすことはなかっただろう。

スポーツができないことでの数え切れないくらいのトラウマ。週 3 日も体育の授業はあるから、その度に胃が痛くなる日々。

真面目にやっていてもできないのに、そんなつらい状況にある俺を怒鳴りつけ、虐待する体育教師たち。

他の大人に相談しても、あの頃は無駄だった。あの当時は先生が絶対の時代。生徒のほうが合わせるしかなかったのだ。合わせられない場合は生徒の方が負け犬と烙印をおされる。

今でもそう言う状況はあるのだろうが、今だったら少なくとも文句は言えるだろう。しかし、あの頃は、誰も理解してくれなかったのだった。

若くして心が壊れてしまうと、もう取り返しはつかない。その後の人生も俺の人生は重い十字架を背負った人生だったのだった。

4. 何かが欠けている。

さて、台風が来る。

今、この原稿を書いている時点（8 月 14 日夜）で、明日は台風で大荒れだという予報がされていて、インスタグラムを見ていると、飲食店はほとんど明日は臨時休業を決めたみたいである。

映画館も軒並み休館を決めている。

これはコロナパニックのピークだった頃以来のことである。

俺も今日の朝、明日までの分の冷凍食品などを買い溜めて、明日の台風に備えている。

今日はマッサージの人にまた来てもらった。実はマッサージの人は、明日までお盆休みで奥さんの実家に行っていたのが、台風が来るので、急遽予定を早めて帰ってきたのだ。

どうということのない、よもやま話が続いた。

「この間友人と焼肉食べに行ったんだけど、そこで追加で、エビとホタテを注文したら、エビが小さいの 1 匹で 750 円もしたんだよ。この間写真インスタに載せたはずだけど」

「確かにこれで 750 円だと小さいですよね」

「何かの間違いかと思って、アルバイトの人じゃわからないだろうから店のご主人に聞いてもらったんだけど、間違いないみたいなんだよね。だけど、場所が大阪の通天閣でしょう。ああいうところだと威勢のいいお兄ちゃんもいるから、こんなんで 740 円なんて、高すぎる！！！と怒り出す人もいるんじないのかね？？？」

「いるでしょうねー。たぶん、肉がメインの店だから海鮮とかは頼む人が少ないから、それでそうなっちゃっているんじゃ！？」

彼とは付き合いが長いので、だいぶ馴れ合いになってしまっている。

「俺は人のことを羨む性格が治らないんだよね。子供がいていいよねー」

「育てるのは大変なんですよ」

「たまに遊ぶだけでいいんだったら、子供欲しいけど」

「人と比べる性格を変えなきゃいけないですよ。ボクシング行ったり、ピアノ習ったり、美味しいもの食べたり、普通の人よりはるかに楽しそうにしているくせに」

「根源的な部分で俺は何か欠けていると感じてるんだよ」

このかけている根源的なものとはなんなのだろうか？

5.『渇水』(高橋正弥監督・2023)

これは生田斗真の主演の映画である。水道料金の滞納世帯を回り、給水停止をしていく水道局職員の話である。

そういえば、俺も若い頃はガスを止められたことが何回かあった。ガスだったらまだどうにかなるけど、水道だったらもっと大変なのではないかと思った。人間は水がなかったら生きれないわけだから。

生田斗真扮する主人公は決してエリートタイプの男ではなく、仕方なくこの仕事をしているという男である。

彼が滞納世帯を回っていく中で、さまざまな人たちと出会う話なのだが、やはり世の中には下層の人はいるのだ。

俺だって、一時期はそうだった。

30 代の終わり。男性グループの人と確執を起こし、グループを離れてからの 3 年ぐらいが一番辛かった。

何よりも収入が激減したので、何も払えなくなったのだった。

あの頃家に帰ると留守電が点滅していて、「國友さん、保険代、約束してくださっていたはずなんですが、、、」と吶々と取り立てやのおじさんの声が入っていた。

区役所に相談に行くと、「確かに、この収入でこの額は高いと思うんですけど」と係の人も同情してくれた。

しかし、あれから20年以上も経っている。

40 になってから仕事が増え、非常勤とはいえ、独身なので比較的余裕のある生活ができるようになった。

非常勤は1年更新なので、いつだって次年度の出講が希望通り来るかどうかが不安だった。実際、不本意な減コマになりかかったことも何度かあった。しかし、それも全て乗り越えて、今はどうにか困らない。

もちろん、今でも非常勤なので次年度の不安はあるが、もう60歳である。その不安にも慣れてきている。これまでも不安に苛まれながら、崩れそうになりながら、どうにかしのいできたんだから、あと10年ぐらいはどうにかなるだろう。

それに俺は確信犯的非常勤だから文句は言えないのだ。好きで非常勤を貫いてきて、あえて専任にはならなかったのだ。自分の気に入ったところならなってもいいが、気に入らないところで専任になるのはいやだと言う気持ちがあった。

結果、京都の大学ばかり5つも教えられる。条件も学生もいいところばかりだ。つくづく、その意味では幸せだ。

俺はアイデンティティにこだわるのである。だから自分のアイデンティティと合わないことはしたくないとずっと意地を張り続けた人生だった。

京都アイデンティティは生まれてきた。教えている大学への愛着もある。このあと、クリスマスには受洗するつもりでいる。水泳やボクシングもやってきた。ピアノも習っている。英語は英検1級である（笑)。

どこが物足りないのか。それはおそらく子供がいないからだ。

この映画でも、悩める主人公に息子から電話がかかってくるところで、エンドとなるのである。誰かの居場所になること。それが悩みの解決策となるのである。

もう自分の子供はもつことはないが、これから歳をとって、わずかでもお金のゆとりがあったら、子供へのボランティアをしたいと思っている。

是枝さんの映画じゃないけど、「そして、父になる」。これが俺の終活かな（笑)。